

ロバート・バトラー博士 一周忌によせて

2011年7月4日

ロバート・バトラー博士が亡くなられて、一年が経ちました。

望ましい高齢社会のあり方について、常に高齢者の側に立ったメッセージを発信してきたバトラー博士は、ピューリッツァー賞の受賞者であり、また ILC-USA の理事長として、ILC グローバル・アライアンスを代表する存在でもありました。バトラー博士はまた研究者として、高齢者問題に関する調査では常に最前線に立っておられました。

彼はアメリカ国立保健研究所 (NIH) に国立老化研究所 (NIA) を設立し、1975 年、初代所長に就任しました。彼の著書、" Why Survive? : Being Old in America " は 1976 年にノンフィクション部門でピューリッツァー賞を受賞しました。

また彼は、アメリカの医学校に初めて老年医学科を設立し、老化に関する調査や老人の精神病、アルツハイマー病に関する多くの重要な組織の設立に貢献しました。現在の老年学の礎は、バトラー博士によって築かれたといえます。

そしてまた彼は、高齢者差別を意味するエイジズムという言葉を生み出しました。

世界各地の ILC において、バトラー博士は私たちの組織 ILC グローバル・アライアンスの提唱者として記憶されています。ILC はいまや、世界的にも有名な組織へと成長しました。そして我々のこの国際的な組織は、また新たなステップに踏み出しつつあります。知識を共有し、バトラー博士が世界レベルに築き上げた問題に向き合うべく、自律的かつ協力的にその歩みを進めています。

ILC イギリスの代表者である、バロネス・サリー・グリーングロス女史は、こう語ります。「類まれな学者であり、また優れた医師、政策分析官、作家であると同時に、バトラー博士は高齢者問題の第一人者の 1 人でもありました。彼は差別や偏見をなくし、高齢社会に対する経済的・社会的な利益をもたらしました。私は、また親友として彼をよく知ることができました。私は彼からいつも多くのことを学んできており、同時に彼がいないことを、心から残念に思っています。私達全員が皆同じように感じているはずです。

彼のリーダーシップとその影響力は、私達 ILC グローバル・アライアンスの歩みとともにあり続けます。彼が行ってきた活動を、高齢者が生きる全ての地域でさらに進展させ、明確な結果として残していくことこそ、私たちができる最大の貢献であり、また、それによって彼が我々の記憶のなかで生き続けるのだと思います。」